様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００４８０

研究課題名（和文）ソシュールの伝説・神話に関する手稿の文献学的研究

研究課題名（英文）Philological Studies on Saussure's Manuscripts concerning Myths and Legends

研究代表者
金澤　忠信（Kanazawa, Tadanobu）

中央大学・理工学部・教授

研究者番号：２０５０７９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：フェルディナン・ド・ソシュールはアメデ・ティエリのアッティラ研究を参照し、叙事詩に過去の事実の痕跡を見出す。その方法論は、現代フランスの歴史研究（主観性の再構築）の対極をなす。また、構造主義神話学や徴候的読解とも異なる。1904年に出版予定だった著作では、ニーベルンゲンの起源をライン川沿いのヴォルムスではなく、ローヌ川沿いのリヨンやジュネーヴとしたが、これはドイツ、フランスに対してブルグントの末裔としてのフランス語圏スイスの国民的アイデンティティを確立するためでもあった。この著作が出版されていたら、彼は一般言語学の創始者としてではなく、特異な神話学者ないし歴史学者として知られていただろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来ソシュールの伝説・神話研究は記号論あるいは構造主義の枠組でしか捉えられてこなかった。しかしソシュールは叙事詩中の一見無意味な細部に歴史的事実の痕跡があると想定し、ブルグント王国の歴史の再構成を試みる。『ニーベルンゲン』の舞台「ブルグンディア」をヴォルムスではなくジュネーヴ周辺とし、クリームヒルトのモデルをブルグント王女クロティルドとする説は、ジークフリートを国民的英雄とみなすドイツに対する痛烈な批判となり、また「フランク」に対する「ブルグント」の優先性を主張することにもなったはずである。このように、本研究によって、ソシュールの伝説・神話研究を、歴史的・地政学的文脈で読むことが可能になった。

研究成果の概要（英文）：Quoting Amedee Thierry's study on Attila, Ferdinand de Saussure searches epics for traces of historical facts. In this respect, his methodology would be the antithesis of that of some modern French historians (reconstruction of subjectivity); besides it differs from that of structuralist mythology or "symptomatic reading". In 1904, Saussure planned to publish a book in which the origin of Nibelungen is not situated in Worms on the Rhine but in Lyon or Geneva on the Rhone. One of his motives for researching on myths and legends is to establish a national identity of the French-speaking Swiss, confronted with Germany and France, as descendants of the Burgundians. If the book had been published, he would have been known rather as unique mythologist or historian than as founder of General Linguistics.

研究分野：言語思想史

キーワード：ソシュール　伝説・神話研究　ニーベルンゲン　ゲルマン英雄伝説　トリスタンとイゾルデ　比較神話学　一般言語学　構造主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

①『一般言語学講義』出版 100 年

スイス・ジュネーヴ出身の言語学者フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）は 1913 年に亡くなっているが、弟子のシャルル・バイイ（Charles Bailly）とアルベール・セシュエ（Albert Séchehaye）が、遺された彼自身の手稿と、三回の「一般言語学講義」に出席した学生のノートをもとに、一冊の書物として、『一般言語学講義』（*Cours de linguistique générale*, 1916, 以下『講義』と略記）を出版する。2016 年はその出版から 100 周年にあたり、世界的にソシュールの読み直しが行われている。金澤も 2016 年 10 月 23 日に開催された日本フランス語フランス文学会秋季大会（於東北大学）のワークショップ「ソシュール『一般言語学講義』の 1 世紀」および 2017 年 6 月 4 日の同学会春季大会（於東京大学駒場）でのワークショップ “Les aléas de la réception de Saussure”（「ソシュールの受容の命運」）にて発表を行った。

バイイとセシュエが編集した『一般言語学講義』は、その後ソシュール自身の思想との齟齬が指摘されるようになり、原資料となった手稿との比較・照合が行われ、注釈が施されるようになった。主要な著作としては、ロベール・ゴデル（Robert Godel）による『一般言語学講義の手書き原資料』（*Les sources manuscrites du cours de linguistique générale de F. de Saussure*, 1957, 以下『原資料』と略記）、ルドルフ・エングラー（Rudolf Engler）による『一般言語学講義』校訂版（*Cours de linguistique générale*, édition critique, 1967-1968, 以下『校訂版』と略記）、トゥリオ・デ・マウロ（Tullio De Mauro）による注釈つきの校訂版（1972）、シモン・ブーケ（Simon Bouquet）による『「一般言語学」著作集』（*Écrits de linguistique générale*, 2002）などがある。しかしこれらはいずれも基本的に一般言語学に関するものであり、伝説・神話研究やアナグラム研究に関する手稿の公刊、あるいはそれらについての研究書はまだ圧倒的に少ないのが現状である。

② ソシュールの伝説・神話研究の公刊および解釈

ソシュールが、「大学での教育と出版活動以外に膨大な時間を費やし」、「ゲルマン伝説について忍耐強い研究」を行っていたことについては、すでにゴデルの『原資料』のなかでわずかながら触れられている（p. 28）。その後、ダルコ・シルヴィオ・アヴァッレ（D′Arco Silvio Avalle）が 10 あまりの断片を「テクスト理論」に関する論文集において紹介した（« La sémiologie de la narrativité chez Saussure », *Essai de la théorie du texte*, 1973）。そこでアヴァッレは、『講義』には文学記号の体系についての言及が欠けていること、伝説・神話研究において言語（langue）と伝説（légende）、言語記号と文学記号（象徴）の比較・同等視がうまく行っておらず、記号に関する用語法も一定していないことを指摘している。これに対してエングラーが激しい批判を寄せ、『講義』においても伝説・神話研究においても、ソシュールの記号概念は一貫したものであり、矛盾や齟齬はないと主張した（« Sémiologies saussuriennes. De l’existence du signe », *Cahiers Ferdinand Saussure 29*, 1974）。

2003 年にはソシュールの手稿およびソシュールに関する論文を収録した大部の書物が Herne 社から出版された（*Saussure*, 2003）。このうち、伝説・神話研究、アナグラム研究、書簡については、金澤によって翻訳書が刊行された（『伝説・神話研究』、月曜社、2017 年）。

ソシュールの伝説・神話研究についての論文としては他にも、キム・スンド「ソシュールの神話学――記号学の開始」（Kim Sungd：« La mythologie saussurienne : une ouverture sémiologique », *Linx*, 1995）、ミシェル・アリヴェ「『講義』と伝説研究の間のソシュール記号学」（Michel Arrivé « La sémiologie saussurienne entre le *CLG* et la recherche sur la légende », *Linx*, 2001）、ベアトリス・テュルパン「伝説・神話・歴史――記号の循環」（Béatrice Türpin : « Légendes — Mythes — Histoire. La circulation des signes », *Herne*, 2003）、ジルダ・サルモン「間テクスト性の科学の条件――ソシュール的比較法の諸アポリアに関する考察」（Gildas Salmon：« Les conditions d’une science de l’intertextualité : réflexion sur les apories du comparatisme saussurien », *RIFL*, 2010）などがあり、それぞれの論者の間で立場や主張は多少異なるが、タイトルからも分かるように、あくまで記号論やテクスト理論といった 20 世紀に興隆した学問の枠組のなかでソシュールの伝説・神話研究を捉えようとしている。

２．研究の目的

従来のソシュール研究では、『講義』と手稿との相違を指摘し、ソシュール自身の言語理論を再構築したり、あるいは逆に、エングラーの『校訂版』のように、『講義』と原資料との間には齟齬・矛盾はないことを証明するのに多くの労力が注がれてきた。しかし、いずれの立場も、一般言語学をソシュールの学説の中核とみなし、記号論の創始者とみなすことに変わりはない。また、一般言語学のソシュール以外に、アナグラムや伝説・神話に関する研究に没頭するもう一人

のソシュールを想定し（「二人のソシュール」）、もっぱら言語記号の体系としての言語（ラング）を扱う共時言語学に収まりきらない新たなソシュール像を提示しようとする論者も、まずは現代言語学、記号論、あるいは構造主義の先駆者としての側面があることを前提としている。

しかしながら、当然のことだが、ソシュール自身は 20 世紀後半に発展した記号論をもとにして伝説・神話研究を行ったわけではなく、自らの伝説・神話研究が、行き詰まりを呈しつつある記号論あるいは構造主義の限界を取り去ることを予期していたわけではない。それはいわばアナクロニズムである。

本研究では、ソシュールの伝説・神話研究を 20 世紀の記号論の枠組からいったん切り離し、19 世紀の歴史比較言語学および伝説研究・神話学のなかで捉え直すことで、ソシュールが伝説・神話研究で真に何を意図していたのかが明らかになる。ソシュールは、ライプツィヒ留学時にドイツ人研究者と必ずしも良好な関係を築いていなかったとはいえ、やはり青年文法学派に属する言語学者である。この学派の特徴は、現存する文献資料のなかに具体的に現れている諸形態の比較を通じて、現存しなくなってしまった原初の形態を再構成することにある。もともと文献学が対象としていた古い文献資料には当然伝説・神話も含まれる。青年文法学派は、新しい方法論とともに、古い文献資料を読み直したと言える。ソシュールは一般言語学、特に共時言語学に行き詰まり、その慰めのために伝説・神話研究に従事したわけではけっしてないのである。

３．研究の方法

ジュネーヴはソシュールの出身地であり、ジュネーヴ図書館には彼の手稿が所蔵されている。そのうち、伝説・神話研究、アナグラム研究に関する手稿および書簡をすべて収集し、ニーベルンゲン、トリスタン伝説、北欧神話、ヴェーダ詩、サトゥルヌス詩に関する資料を中心に読解作業を進めた。

ソシュールが具体的に研究対象としているテクストは、『ニーベルンゲンの歌』、『トリスタンとイゾルデ』、中世英雄叙事詩『クードルーン』、中世恋愛抒情詩『ミンネザング』、「エッダ」あるいは「サガ」と呼ばれる北欧神話、ギリシア神話（特に「テーセウス」）など多岐に渡るため、それらに関連する書籍を購入・読解した。また、中世ラテン語、古高ドイツ語、古フランス語、古アイスランド語に関する書籍も入手し、ソシュールの手稿を読解する際に参照した。

2018 年 8 月に 2 週間ジュネーヴに滞在し、ジュネーヴ図書館（BGE）所蔵のソシュールの手稿・書簡および言語学者、文献学者、歴史学者、文学者らによる伝説・神話研究関係の資料を収集した。伝説・神話研究関連の草稿のうち、資料番号 Ms. fr. 3958（1063 ファイル）および Ms. fr. 3959（1056 ファイル）のすべてを TIF 形式で入手することができた。伝説・神話研究にあてられた手稿は全部で 814 枚にのぼるが、それらは必ずしも資料番号順に整然と書かれているわけではない。これらの手稿の一部を編纂・活字化したテュルパンは、ノートの順番やノート内の頁の順番を変えることで、出版物としての体裁を保持しようとしている。その編纂方法は根拠に欠けるわけではないが、テクストの取捨選択および順序づけに独自の解釈が入りこんでいることは否定できない。そこで金澤は、基本的にテュルパン版を参照しつつも、可能な限りソシュールが執筆した順序を推測し、テュルパンによって採用されなかったテクストも漏らすことなく、読解作業を進めていくことを心がけた。

2019 年 8 月末から 9 月初めにかけて 10 日ほどジュネーヴ図書館で前年に収集しきれなかった手稿資料を中心に調査し、本研究に関わる重要な資料を選別し購入した。このときは特に歴史学者アメデ・ティエリ（Amédée Thierry）『アッティラとその後継者たちの歴史（*Histoire d'Attila et de ses successeurs*）』に関する手稿を見つけることができた（Archives de Saussure 382/5, f. 35）。そこには、過去についての主観的想像を徹底的に排除し、過去に起こった事実をできるかぎり客観的に検証するという、「歴史」に対するソシュールの一貫した研究姿勢を読み取ることができる。これはおそらくソシュールの伝説・神話研究の方法論的基礎となった。

ジュネーヴ滞在の折に、ジュネーヴの市外区カルージュにあるジギスムント広場を訪れたが、ブルグント王国にまつわる記念碑や遺跡などは見あたらなかった。また、やはりジギスムントとジゲリック（ソシュールによればジークフリートのモデル）に縁のあるサン・モーリス修道院にも足を運んでみたが、こちらも直接手がかりになるような資料を見つけることはできなかった。しかし、ソシュールが「伝説」発祥の地と推定した交通の要衝サン・モーリスを実際に歩いてみて、ローヌ川と岩山に挟まれたこの隘路を通って「鎮魂歌」が「年代記」となり「叙事詩」となって北へ向かうという歴史的想像力を掻き立てられた気がした。

ソシュールの伝説・神話研究の方法論がある程度明確になった時点で、①イヴァン・ジャブロンカ（Ivan Jablonka）やアラン・コルバン（Alain Corbin）ら現代フランスの歴史学・文学研究、②カルロ・ギンズブルグ（Carlo Ginzburg）の言う「推論的範例」あるいは「徴候的読解」、③クロード・レヴィ＝ストロース（Claude Lévi-Strauss）の構造主義神話学との比較を通じて、ソシュール伝説・神話研究の独自性および現代性について考察した。

最終的に、ソシュールが出版を予定していた伝説・神話研究に関する著作の草稿を、当時の時代状況およびソシュール自身の政治的言説と照らし合わせ、そのイデオロギー性を浮き彫りにした。

４．研究成果

フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）は 1903 年から 1910 年にかけて伝説・神話研究を行っていた。1904 年夏学期（4 月 8 日～7 月 15 日）にはジュネーヴ大学の同僚エミール・ルダール（Émile Redard）の代わりに『ニーベルンゲン』に関する講義を担当した。同時期に『ニーベルンゲンの歌』に関する書物の出版を準備しており、いくつかの手稿に書物のタイトル案、目次、「序章」などが散見する。妻マリー（Marie de Saussure）宛ての手紙には、夏休みの終わりに書物の印刷を始める旨の文言も見られるが、結局「書物」は出版されなかった。

ソシュールの伝説・神話研究における最初の前提にして最終的な結論とは、伝説の根底には「歴史」がある、ということである。伝説は「純粋な空想の産物」ではなく、「歴史的な下地」のうえで伝承される。具体的には、「ドイツの英雄伝説（la légende héroïque allemande）」の根底には「ブルグント伝説」があり、その根底には「ブルグント叙事詩」があり、さらにその根底には、「ブルグンディア」で起こった歴史的事件がある。

すでにソシュール以前から、ブルグント族に関わる歴史的事件が『ニーベルンゲンの歌』の成立になんらかのかたちで関与しているのではないかという議論はあった。『ニーベルンゲンの歌』の舞台がヴォルムスであることから、413 年にライン川沿いのヴォルムスに建設されたブルグント王国（ヴォルムス王国）での歴史的事件がこの英雄伝説のもとになった、というのが、現在でも通説となっている。ソシュールの独自かつ特異な点は、「歴史にたいして恒久的にひとつの具体物を提示する唯一のブルグンディア王国」を、ヴォルムス王国ではなく、リヨンを中心都市とするブルグント王国（リヨン王国）とすることにある。ソシュールは後者を「ブルグンディア第一王国」と呼び、443 年から 534 年（あるいは 543 年）にかけて展開した一連の出来事に「歴史的な場」を想定している。実際「書物」のタイトル案には、「ニーベルンゲン伝説とブルグンディア第一王国（La légende des Nibelungen et le Ier Royaume de Burgondie）」、「ジークフリートの伝説とブルゴーニュ第一王国の歴史（La légende de Sigfrid et l′ histoire du Ier royaume de Bourgogne）」などがある。

ソシュールは、伝説上の「ジークフリートの死」に対応すると想定される歴史的事実として、「ブルグンディア第一王国」の王子ジゲリック（Sigéric）の暗殺事件（522 年）をとりあげる。ただし、ジゲリックの父ジギスムント（Sigismond）がブルグント国（リヨン王国）の王であるのに対し、伝説上の英雄ジークフリートの父ジークムントはニーデルラント国の王であり、英雄はブルグンディア（ヴォルムス）で、叙事詩として生き、そして死ぬ。また、伝説上のブルグント王の地位はグンテルが占めている。

ソシュールはまず、「ジークフリートの死」について、いくつかの異本を突き合わせながら、伝説のより「古い基盤」を見極める。その際基準となるのは「詩趣喪失（dépoétisation）」と呼ばれるものである。たとえば一つの異本で英雄は狩りの最中に殺される。別の異本では狩りから戻ったあと、自室のベッドで睡眠中に殺される。二つの異本のうち、より古いのは後者のほうである。狩りの最中に比べると、室内で睡眠中に暗殺されるのは、英雄にはふさわしくない死に方であり、後代に「伝説をまとめる詩人」が、偉大な叙事詩に見合わない舞台をわざわざ追加するはずがないからである。だからそれはもともと「古い基盤」にあった、ということになる。このような仕方で、現存している異本のうち、成立年代のより古い異本を推定し、次に、異本のなかに現れている説話の形態から、異本には現れていない説話の原初形態を類推する。この点で、ソシュールの伝説・神話研究は、ライプツィヒの青年文法学派の方法論を踏襲していると言える。

こうして再構成された英雄暗殺の場面は、トゥールのグレゴリウスが語るジゲリック暗殺の場面とほぼ一致する。『フランク史』ではジゲリック暗殺の要因は第二夫人の恨みということになっているが、ソシュールは事件の背後に王位継承をめぐる政治的状況を読み込み、ジギスムントの弟ゴドマール（Godomar）の関与を指摘している。

ジゲリックはジュネーヴで成長し、彼の葬儀はサン・モーリスの聖堂で営まれた。この二つの場所はいずれも「ブルグンディア第一王国」の領内にある。『ニーベルンゲンの歌』のジークフリートはニーデルラント（クサンテン）で生まれ、異国の地ブルグンディア（ヴォルムス）で活躍し、そして暗殺された。もしジークフリート＝ジゲリックであるなら、生誕ないし幼少期に関わる場所と、死に関わる場所が多少とも離れている点が共通している。クサンテンとヴォルムス、ジュネーヴとサン・モーリスは、それぞれ別の場所だが、関係が類似している。「実体」の類似性ではなく「関係」の類似性というのは、伝説・神話研究とほぼ同時期に構想されていた一般言語学と通底する考え方であり、またのちのレヴィ＝ストロースの構造主義的な神話学とも相通ずる部分がある。しかし、ソシュールの伝説・神話研究は、諸神話の比較・分析から「神話の構造法則」を明らかにし、神話的思考と科学的思考の共通性、延いては人間精神の普遍性を証明することには向かわず、あくまで「歴史的事実」の探求に向かうのだが、クサンテンとヴォルムスがドイツのライン川沿いにあり、ジュネーヴとサン・モーリスがスイスのローヌ川沿いにあるということをソシュールはことさら重要視しているように見える。

このローヌ川沿いの隘路にあるサン・モーリスから、ジゲリックの死の知らせ（追悼詠唱）が、

「歴史的」ではない国民（nation）であるアラマン族によって、ドイツ語（アラマン語）で、北方へと伝えられ、「歴史的背景」がわからなくなり、「神話的な細部やお伽話」であふれ、そうして成立したのが『ニーベルンゲンの歌』であるとソシュールは想定する。

英雄らしからぬ死に方をした王子ジゲリックに関して、叙事詩は「歴史にたいする嘘」をつくわけにはいかない。しかし追悼詠唱も「ブルグント年代記」も、新王ゴドマールの手前、事件の真相を語るわけにはいかなかった。そこで「叙事詩」は「想像上の存在にたいする果てしない勝利を好人物に付与」する。この「好人物」に「威光」を纏わせるために持ち出される「想像上の存在」は、「竜」にほかならなかった。「竜殺し（Drachentöter）」は英雄ジークフリートの代名詞にもなるが、それは現実の戦争に参加したことがなく、武勲と呼べるものがないまま寝室で暗殺されたジゲリックに、叙事詩がかろうじて付与しえた「果てしない勝利」だった。ただし、「竜の物語」は叙事詩独自の創作ではなく、ギリシア神話（テーセウス伝説）から取り入れられたものだった。

ソシュールは、『ニーベルンゲンの歌』の成立に関与したもう一人の歴史的人物としてクロティルド（Clotilde）をとりあげ、クリームヒルトのモデルであるとしている。クロティルドの父キルペリク 2 世（Chilpéric II）は兄グンドバットに暗殺され、近親者はローヌ川に投げ込まれた。クロティルドは叔父ゴデギゼル（Godegisèle）の庇護のもと、ジュネーヴの王領で敬虔なカトリック信徒として隠遁生活をした。成長してフランク王国の王クローヴィス（Clovis）と結婚し、王のカトリック改宗に貢献した。

ソシュールによれば、「胚胎期の叙事詩的伝説」が成立しつつあったとき、年代記とまだはっきり差異が感じられるわけではなく、「ブルグントの祖国愛（patriotisme burgonde）」に染まっていた。このような状況において、王妃クロティルドはブルグント王国を滅亡させた「裏切者」ではあるが、同郷の王女でありフランク王国の王クローヴィスの王妃である以上「好人物」として描かれなければならならなかった。さらにクロティルドを含め、25 年ほどの間にクローヴィス家に嫁いだ三人のブルグント王女が、伝説において一人の女性に置き換えられた可能性があるとソシュールは見ており、「歴史的な三重のクリームヒルト」と名づけている。

『ニーベルンゲンの歌』をはじめゲルマン英雄伝説には「フランク王国」あるいは「フランク族」がまったく出てこないのだが、このことについてソシュールは、フランク王国創設時にクローヴィスが「異教の王」であり、「のちに異教のフランク君主を認めることが不可能であり不都合であった」ため、伝説は「異教の王」の典型であるアッティラに置き換え、それに合わせるかたちでフランク族をフン族に、時代と舞台についても 5-6 世紀ローヌ川流域の「ブルグンディア第一王国」を 5 世紀初めライン川沿いの「ブルグント国」に移し替えたのではないかと推測している。この「フランクの不在」に関して、ソシュールは必ずしも「徴候的読解」を試みているわけではない。

「クロティルドの歴史物語」は、「ドイツ」では地理と時間と人物たちを転位させて英雄伝説となり、他方でフランク王国の歴史的出発点となった。もちろんフランク王国は歴史的に「フランス」の起源である。してみると、ソシュールの伝説・神話研究が目指す最終地点とは、「ドイツ」の国民的英雄伝説と「フランス」の歴史双方の根底によこたわる、ローヌ川流域サパウディアの「ブルグンディア」である。ソシュールはそこに自らの出自（nationalité）の基盤を置いているように見える。それは彼の伝説・神話研究のイデオロギー的側面でもある。

仮にソシュールが 1904 年に「書物」を出版していたらどうなっていただろうか。ドイツ統一以降『ニーベルンゲンの歌』は当時の政治的状況に巻き込まれるかたちで「国民的英雄叙事詩」となり、ジークフリートは「民族の英雄」となった。崩壊寸前のオスマン・トルコ帝国に進出しようとするロシアとイギリスとの衝突の危機が高まっており。政情が不安定だったバルカン半島でも、「汎スラブ主義」を掲げて進出を図るロシアに対し、オーストリアがドイツと同調するかたちで「汎ゲルマン主義」を唱えて対抗した。このような状況で、『ニーベルンゲンの歌』は伝説において「汎ゲルマン主義」を展開する場となり、「ヴォルムス周辺に位置していた伝説上のブルグンディア」は「ある種ゲルマンのオリンピア（une sorte d’Olympie germanique）」となった。

第 1 回近代オリンピックは 1896 年にアテネで開催された。オリンピアは古代ギリシアの主神ゼウスの聖地であり、戦争中であっても祭典が営まれる期間だけは停戦した。近代オリンピックを開始するにあたり、ギリシアは毎回自国開催を主張したが、国際オリンピック委員会は毎回別の場所で開催する決定をした。1900 年の第 2 回パリ・オリンピックは万国博覧会と同時開催のかたちになり、当初の理念とはかけ離れたものになっていく。しかし叙事詩のなかの「ゲルマンのオリンピア」では、列強の思惑に左右されることなく「汎ゲルマン的競技」が行われるだろう。だからこそ、ドイツにとって、「伝説上のブルグンディア」は、ライン川沿いの「ヴォルムス周辺」になければならなかった。英雄伝説は、ドイツに起源をもつ、ドイツ固有のもの、純粋にドイツ的なものでなければならなかった。

しかし、ソシュールの仮説では、英雄伝説の源流はライン川ではなくローヌ川であり、ゲルマン的なものはローマ的なものやギリシア的なものとの接触・混淆によってしか成立しなかった。起源としての「歴史的事実」はおろか、ジークフリートの専売特許であるはずの「竜殺し」さえ自前のものでないとしたら、どこまで行ってもゲルマンに固有なものはない。「書物」はドイツでは批判され発禁処分になったかもしれないが、ソシュールは「一般言語学の創始者」ではなく、伝説・神話を研究対象とする特異な歴史学者としてその名を知られることになっただろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 金澤忠信	４．巻 106号
２．論文標題 ソシュールとレヴィ＝ストロース、ジークフリートとオイディプース	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	６．最初と最後の頁 39-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金澤忠信	４．巻 80
２．論文標題 ソシュールの伝説・神話研究における幻想的存在	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『幻想的存在の東西：古代から現代まで』（中央大学人文科学研究所研究叢書）	６．最初と最後の頁 75-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金澤忠信	４．巻 102号
２．論文標題 ソシュールの伝説・神話研究と推論的範例	５．発行年 2022年
３．雑誌名 『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）	６．最初と最後の頁 263-289
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金澤忠信	４．巻 33号
２．論文標題 歴史と伝説――ソシュールの伝説・神話研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『フランス文学』（日本フランス語フランス文学会中国・四国支部会誌）	６．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金澤忠信	４．巻 92.3
２．論文標題 ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念	５．発行年 2019年
３．雑誌名 香川大学経済論叢	６．最初と最後の頁 7-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 金澤忠信
２．発表標題 ソシュールの伝説・神話研究
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ソシュールの伝説・神話研究における歴史の概念 http://shark.lib.kagawa-u.ac.jp/kuir/metadata/28825

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関